

機関番号：25406

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20520335

研究課題名(和文) 漢代五言詩歌の伝播とその文学的昇華の過程に関わる研究

研究課題名(英文) A Study of the Five-character Poetry in the Han Dynasty and the Process of its Literary Sublimation

研究代表者

柳川 順子 (YANAGAWA JUNKO)

県立広島大学・人間文化学部・教授

研究者番号：60210291

研究成果の概要(和文)：本研究は、五言詩という詩型が、詠み人知らずの詩歌から、知識人の文学へと展開していった経緯を明らかにしたものである。特に、知識人による五言詩の祖と目される漢代の古詩について、この作品群の中に別格の一群が存在することを指摘し、このことを手がかりに、古詩が成立した場やその年代を推定し、この詩型が急速に知識人社会に伝播していった理由を解明した点で、これまでの研究史に新たな一視点を加え得たと言える。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this paper is to show the process in which the five-character poetry developed from anonymous poetry into intellectual literature.

This paper will add another viewpoint to the previous studies, by pointing out the fact that there was an exceptional section in the group of ancient poems in the Han Dynasty, regarded as the origin of the five-character poems written by the intellectuals; with this fact as a clue, estimating when and where these ancient poems appeared; and making clear the reason why this form of poetry spread rapidly among the intellectuals.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	600,000	180,000	780,000
2009年度	200,000	60,000	260,000
2010年度	200,000	60,000	260,000
年度			
年度			
総計	1000,000	300,000	1300,000

研究分野：中国文学

科研費の分科・細目：文学・各国文学・文学論

キーワード：五言詩型、古詩、古楽府、宴席、建安文壇

1. 研究開始当初の背景

(1) 初期の五言詩に関わる先行研究は、次のような状況にあると捉えられた。

①五言詩は中国文学の代表的なジャンルの一つでありながら、その起源と初期の展開状

況についてはほとんど未解明の状態である。その成立時期については、後漢時代後期(2世紀半ば)とする説が有力である。

②五言詩は3世紀初頭、三国魏の建安文壇において始めて知識人の文学として定着し、隆盛を極めたが、この画期的な文人集団が生み

出した五言詩を、漢代詩歌との関係において歴史的に捉える論は、上述①のような理由により、未だ誰もが認める定説にはたどり着いていない。

(2) このような状況に対して、申請者が申請時当時までに行っていた研究は、次のような幾つかの新見地を導き出していた。

①知識人による五言詩の祖と位置づけられる、古詩（漢代詠み人知らずの五言詩群）の中には、古くから別格視されてきた一群（第一古詩群：申請者による仮称）が存在する。

②第一古詩群の中の一首が、既に後漢初期（1世紀末）の賦作品に、明らかな典故表現として用いられている事例があることから、古詩の成立年代を後漢後期と見る現行の定説には、見直しが必要だと判断される。

③古詩の成立年代を後漢後期と見る定説の成立経緯をたどってみると、冷静な学術的議論の末に導き出されたものであるとは言い難いし、その論拠も不確かであると言わざるを得ない。

④第一古詩群の中でも、更に始原的な位置を占める諸篇は、前漢時代後期（前1世紀）、後宮の女性たちを交えた遊宴空間で成立した可能性が高い。

他方、第一古詩群の中では最も遅れて成立したと推測される諸篇は、後漢時代初め（1世紀前半期）、洛陽の貴顕たちが催す宴席で成立した可能性が高い。

⑤古詩と並んで建安詩に影響を与えた古楽府（詠み人知らずの歌辞）は、主にその来歴により、少なくとも建安年間当時においては、二つの異質な歌辞群「相和」と「清商三調」とに分けて捉えられていたと見られる。

2. 研究の目的

上述のような研究状況を踏まえ、漢代五言詩歌史について、次のような問題を解明したいと考えた。

(1) 詠み人知らずの漢代五言詩歌が、いかにして知識人の文学へと昇華していったのか、その展開の経緯を明らかにする。

(2) 古詩との類似性がしばしば指摘されてきた古楽府について、その古詩との関係性を再検討する。

(3) 漢代詩歌に続く建安詩の文学史的意義

を、古詩・古楽府を中心とする前代の詩歌との関係性という視点から歴史的に捉える。

3. 研究の方法

(1) 詩歌の伝播状況を、それが生成する場というものを介して追究する。

漢代五言詩歌は、主に宴席という場で生成、展開した文芸であるが、宴席という遊戯空間の実態や流布状況、そうした場をめぐる人々の動向を探ることによって、漢代から建安に至る、五言詩歌の展開や伝播の経緯を明らかにする。

(2) 詩歌相互の関係性を、言語表現上の類似性を手掛かりに究明する。

古詩、蘇李詩（李陵・蘇武の名に仮託された五言詩群）、古楽府、その他の漢代詩歌、及び建安詩は、相互に近似する表現を共有しているが、その辞句や措辞の類似性を詳細に洗い出し、その継承関係を精密に検討することによって、それら諸篇の歴史的な位置関係を確定する。

4. 研究成果

(1) 論文として公刊された成果

①民衆の歌である古楽府から、知識人の手に成る古詩が派生したと捉える従来の定説に対して、もともと来源の異なる両者が、ある時期以降、宴席という場を介して相互に乗り入れるようになり、中には古詩の辞句を取り込んで成った、知識人による古楽府というものも出現するに至ったのだということを論証した。……論文(1)

②第一古詩群の外にある古詩「凜凜歳云暮」を通して、後漢中期（2世紀前半期）には既に知識人による古詩が出現していたことを論証した。本詩は、その表現技巧から知識人の作だと判断されること、作者名の明らかな後漢末の五言詩に、本詩を明らかに踏まえる表現が認められること、更に、そこから割り出せる本詩の制作年代と同じ頃、知識人による五言句型の作品が複数確認されることから、上述のような結論が導き出された。更に、こうした新動向の背景に、枚乗という文人の名を冠する第一古詩群の成立という出来事があったのではないかと推論をも示した。……論文(2)

③従来、古詩や建安詩との近似性から、その成立年代もそれらに隣接すると推測されてきた蘇李詩について、その辞句や措辞の継承

関係を詳細に分析することにより、建安文壇の成立当時、この詩群は既に古詩と並ぶ古典的作品群と認識されるに至っていたことを論証した。また、本詩群に特徴的な辞句やモチーフから、その成立の場を、後漢王朝の外戚が催す宴席と推定した。……論文(3)

④始原的位置を占める古詩の中、「涉江采芙蓉」「庭中有奇樹」の二首について、その『楚辞』九歌との特別な影響関係を指摘し、他方、前漢時代、『楚辞』九歌が実際に演じられていた可能性が高いことを論証した上で、この二首の古詩が誕生した場を、後宮の女性たちが多く与る前漢王朝の遊宴空間と推定した。……論文(4)

⑤古楽府を無名性から脱却させる契機となったのは、三国魏の創始者、曹操による楽府詩の制作であるが、彼を取り巻く後漢知識人たちの古楽府へのスタンス、及び彼らの持つ文化資本と曹操の教養基盤との違いを押さえた上で、曹操におけるそうした行為の動機を探った。併せて、彼の楽府詩に認められる表現的特徴と、その特徴の由来するところについても考察した。……図書所収論文(1)

(2) 成果を公開する学術書の原稿作成

申請者のこれまでの論稿に全面的な加筆修正を施し、本研究の成果（公刊されたもの以外の論考をも含む）と併せて体系的な論著となるように再編成した。「漢代五言詩歌史の研究」と題する原稿の概要は次のとおりである。

①古詩の成立年代

数ある古詩の中でも、陸機「擬古詩」の模倣対象となり、『玉台新詠』に枚乗「雜詩」として収録され、『詩品』に自明のこととして絶賛されている一群は、古来別格視されてきた特別な古詩群である。これを第一古詩群と仮称する。

この一群の成立年代はそれほど拡散しないと推測されるが、その中、比較的新しい時代に成ったと目される「東城高且長」詩が、既に後漢初めの傅毅「舞賦」に明らかに踏まえられていることから、その成立年代は、少なくとも第一古詩群に限っては、従来言われてきたように後漢の後期ではあり得ない。

古詩の成立年代を後漢の後期とする現行の定説は、民国時代、日本の鈴木虎雄の所論に触発された中国の学者たちによって、ある種の熱気を帯びた論争の中で、ごく短い期間の内に作り上げられたものであり、それは必ずしも冷静な学術的討論の産物であるとは言いがたい。

②原初的古詩の成立

第一古詩群を、宴席への言及、「人生云々」という措辞、後漢の都洛陽への言及、句数における法則性の有無によって区分けし、その結果、原初的古詩と目される幾つかの作品を割り出すことができた。

原初的古詩の一つ「青青河畔草」は、長安一帯の方言と、燕趙で盛行した韓詩に由来する辞句とを対句に配する。この特徴的な表現が生まれ得るのは、燕趙出身者を多く擁する、長安の後宮を措いて他にはないだろう。

また、「迢迢牽牛星」詩の詠ずる牽牛織女の悲恋物語は、前漢王朝の園林中に湖水を挟む一対の石像として具現化されており、そこではしばしば後宮の女性たちを交えた遊宴が設けられている。

更に、「涉江采芙蓉」「庭中有奇樹」の二首は、前漢王朝の遊宴で実際に演じられていたと推測される『楚辞』九歌との特別な関わりを示している（論文成果④）。

以上のことを総合して考えると、原初的古詩の成立は、前漢時代の後期、後宮の女性たちを交えた宴席においてであったと見るのが最も妥当である。

③原初的古詩の展開

第一古詩群の中、原初的古詩の展開形と見られる「西北有高樓」「東城高且長」「明月皎夜光」は、原初的古詩に連なるモチーフを含みながらも、知己を求める思い、時の移ろいへの焦燥感、友情の崩壊など、新たな要素をも多分に含み、その作者像としては、宴席に集う男性知識人が想定される。

他方、第一古詩群の中では最も遅れて成立したと目される「今日良宴会」「青青陵上柏」「驅車上東門」は、後漢時代の初め、洛陽に邸宅を構えていた王侯貴顕たちの主催する宴席で、そこに集う無名の知識人たちによって作られた可能性が極めて高い。

こうしてみると、古詩は、宴席という場を仲立ちとして、その担い手を後宮の女性たちから宴席に集う知識人たちへと拡大していったと言える。

これに並行して、古詩は死者の住む陵墓の傍らでも詠じられるようになっていった。こうした現象の背景には、死生観の変質に伴い、死者に対しても、現世と変わらない宴席が設けられるようになったということがある。比較的新しい時代に成ったと推定される古詩に、死後の世界との交錯が濃厚に認められるのは、こうした趨勢の産物である。

④後漢時代における古詩の伝播とその展開

後漢時代の初め頃まで、五言詩はなお多くの知識人たちにとって、自ら手を染めるには値しない文芸であった。ところが、後漢の中期以降、知識人による五言句型の作品が出現

してくる。

ちょうど同じ頃、にわかに復興してきた文芸ジャンルが、前漢の枚乗を始祖とする「七」である。枚乗と言えば、第一古詩群の作者としても伝えられていた人物である。

これらのことを考え合わせると、五言詩が知識人たちに公認された後漢中期に先立つある時期、枚乗の名を冠する特別な古詩群、すなわち第一古詩群が詩群として成立するという出来事が起こり、これが契機となって、知識人たちの間に急速に古詩が流布していったのではないかと推測される。この時期は、ちょうど第一古詩群の諸篇が全て出揃うと推定された時期の直後に当たっている（論文成果②）。

また、こうした動向に並行するものとして位置づけられるであろう作品群として、前漢の李陵・蘇武の名に仮託された一連の五言詩がある。彼らの故事は、歌舞を伴って宴席で演じられていた可能性が高く、古詩とは場を共有する関係にあったと推測される。ならば、彼らの離別をモチーフとするこの五言詩群もまた、宴席という場において誕生したと見ることができる（論文成果③）。

⑤ 古詩と古楽府との関係性

古楽府を多数収録する基本文献に、『宋書』楽志と『楽府詩集』とがあるが、漢魏における古楽府の実態をより正確に伝えるのは前者である。この資料により、古楽府の「相和」と「清商三調」とは、異質な歌辞群として捉えるのが妥当だと判断される。

古詩との近似性がしばしば指摘される古楽府だが、それは「清商三調」に属する歌辞に限定される。また、「相和」の中には、非常に古い来歴を持ち、漢王室において演奏されてきた経緯を持つものも少なくない。魏王朝においては、「相和」は政権の権威づけのために、「清商三調」は娯楽のために行われたのではないかと推測される。

古詩と古楽府との関係については、古楽府「飲馬長城窟行」や「長歌行・青青園中葵」に、古詩の辞句を明らかに踏まえた形跡が認められることから、従来の説のように、古楽府から古詩が生まれたと見るのではなく、両者の関係は、前述（論文成果①）のように複線的に捉えるのが妥当だと判断される。

⑥ 第六章 建安文壇の歴史的位置

漢代詩歌史に関する以上の論を踏まえた上で、五言詩の勃興によって特徴付けられる建安文壇を、漢代文学からの延長線上に位置づけ、その文学史的意義を明らかにした。その主な内容は次のとおりである。

曹操における楽府詩制作は、後漢知識人層を御してゆくために、彼らの楽府詩に対する意識を踏まえ、彼我の教養的基盤の違いをも

念頭に置いた上で企てられた、極めて意図的な行為であった。また、曹操の楽府詩に目立つ過剰な典故表現は、知識人層に対するコンプレックスの無意識的な表れと解釈することができる（論文成果⑤）。

建安文壇は、基本的には漢代の宴席文化の延長線上に位置づけられるが、前代のそれとは明らかに異なる部分も認められる。それは、主催者自身が創作活動に携わっていること、そして主催者と参加者とが対等に近い関係を結んでいることである。こうした関係性の中に、その後に出現する貴族制の萌芽というものを見出すことができる。

⑦ 呉の文学風土と陸機の「擬古詩」

陸機の「擬古詩」について、漢魏の詩歌史に関する上述の論を踏まえ、彼の故郷である呉の文学風土を押さえた上で、彼がその模擬対象を第一古詩群に限定し、しかも「擬古詩」という表現様式を選び取った理由を考察した。その内容はおおよそ次のとおりである。なお、この論は、文化的中心地の外にある呉人の目から、漢魏の五言詩歌史を捉えなおすという側面をも持つ。

五言詩という詩型は、もともと南方の民歌に由来するものであるが、漢代以降、それは主として中原一帯の上流階級の催す宴席という場で洗練の度を増してきた経緯がある。他方、陸機が生まれ育った時期の呉では、四言詩が知識人たちの文学として行われていた。呉から中原の西晋（魏の後続王朝）に出仕した陸機は、その文化的差異を認識しつつ、しかも五言詩の本流は我が呉にありとする、中原文化への対抗意識を強く持っただろう。第一古詩群の作者と伝えられていた枚乗が、陸機とほぼ同じルートをたどって中原入りした文人であることも強く意識されていたに違いない。陸機の「擬古詩」は、こうした動機から作られたと思われる。

他方、陸機の「擬古詩」には本歌である古詩に努めて忠実であろうとする表現姿勢が顕著であって、彼の真率なる思い、たとえば故郷に遺してきた人々への思いなどは、むしろ古詩との微妙なズレの中にこそ感受されるものである。こうしたストイックな表現姿勢の中に、異郷に仕官する陸機の、屈折した心情を垣間見ることができる。

(3) 本研究に対する評価

本研究の成果は、その主要なものは全て査読付きの学術雑誌に投稿し、従来の定説に見直しを迫る新しい視点として、賛否両論を含みつつ一定の評価を受けた。

「漢代五言詩歌史の研究」の原稿は、創文社の東洋学叢書の審査を受け、通過した（2010年12月）。

柳川 順子 (YANAGAWA JUNKO)
県立広島大学・人間文化学部・教授
研究者番号：60210291

(4) 今後の展望

まず、漢代に続く魏晋の詩人たちに視界を広げ、詠み人知らずの宴席文芸が、個人的感懐を詠ずる文学へと脱皮したのはどのような契機によるのか、更に考察を深めたい。

他方、漢代詩歌をめぐる諸相は、漢墓から出土する画像資料との関係性を適切に測ることによって、より明瞭に再現し得るのではないかと予測されるが、本研究ではこの方面にそれほど深く踏み込むことができなかつた。こうした側面からのアプローチにより、幾つかの新見地が得られる可能性も残されている。

また、このように、個人による研究には限界があると痛感させられた。今後は、他分野の研究者とも連携して考究を進めることができると考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

- ① 柳川順子、漢代古詩と古楽府との関係、日本中国学会報、査読有、62集、2010、pp. 15—29
- ② 柳川順子、後漢時代における古詩の一系譜—古詩「凜凜歳云暮」を手掛かりとして—、九州中国学会報、査読有、48巻、2010、pp. 16—30
- ③ 柳川順子、漢代五言詩史上に占める蘇李詩の位置、中国文化、査読有、67号、2009、pp. 1—13
- ④ 柳川順子、原初的「古詩」の性格—『楚辞』九歌との関わりを手がかりとして—、六朝学術学会報、査読有、10集、2009、pp. 1—16

[学会発表] (計2件)

- ① 柳川順子、漢代古詩と古楽府との関係、日本中国学会、2009年10月10日、文教大学
- ② 柳川順子、李陵・蘇武詩の成立の場、中国文化学会、2008年6月28日、横浜市立大学

[図書] (計1件)

- ① 柳川順子、曹操楽府詩私論、三国志学会編、汲古書院、狩野直禎先生傘寿記念三国志論集、2008、pp. 161—182 (総ページ数：583ページ)

6. 研究組織

(1) 研究代表者